



「歌舞伎十八番之内総角乃助六(三枚続)」
—竹内文庫(錦絵)より—

近世日本音楽の宝庫 竹内文庫

高橋 京子

図書館の2年に渡るリニューアル工事もこれで一段落、利用者の皆様には色々ご迷惑をお掛けしましたが、新しい図書館はいかがでしょう？これから更に、居心地の良い図書館を皆さんと一緒に創ってあげたいと思っています。

図書館の仕事？

さて皆さん、図書館はどんな仕事をしているところかご存じですか？カウンターでの貸出・返却、資料収集といった事を想像するでしょう。その他にも、OPAC目録の管理と更新、イベント企画など皆さんと直接関わりの深い部分はよくご存じだと思います。この日々の業務の他に、大学図書館には研究図書館という側面もあり、これからお話しする「特別資料の整理と管理」というのが、まさにそれにあたります。

どこの図書館にもそれぞれ役割があり、所属機関の目的に合わせて資料収集が行われています。もちろん当館も音楽資料と皆さんの

授業や学んでいる学科に応じた資料を基本に収集されています。実はその他に、「特別資料」という枠組みのコレクションがあります。新1号館のサインパネルで見ることが出来る19世紀以前の印刷楽譜や、ベートーヴェンの初期印刷楽譜は、貴重なコレクションの筆頭ともいえるべき資料です。これら「特別資料」は、マイクロフィルムやデジタル画像として、館内で画像閲覧が出来ますので、これを機会に是非利用してみてください。

本題「竹内文庫」って？

今回は、その貴重なコレクションから「竹内文庫」のお話です。竹内文庫は、竹内道敬先生が近世日本音楽を研究される中で長年に渡り集められた資料を「文庫」という形で御寄贈いただき、皆さんが利用できるようにしたものです。竹内先生は、本学で1997年まで近世日本音楽分野の教鞭を執られました。歌舞伎公演で使用される「イヤホンガイド」の解説を現在も担当されており、知らずに利用

していたなんて事があるかもしれませんね。また、様々な演奏会の企画や解説など、多方面で活躍されています。文庫に収められているのは、日本の舞台音楽、三味線音楽を中心に、台本、番付、錦絵など、資料の形態も多岐にわたっています。また、祭祀に関するものも充実しており、これらの一次資料は大変重要なものが多いです。現在これらは目録11冊に及び、館内の専用端末よりデジタル画像で閲覧できます。似たようなコレクションとしては、早稲田大学演劇博物館などが有名ですが、そこにもない貴重な資料が竹内文庫には収められています。

御寄贈頂いた資料も、ただ置いておくだけでは宝の持ち腐れになってしまいます。これらを整理し利用できるようにする事も、図書館の仕事になります。これら貴重な資料を図書館員は目録を作成するプロとして、どういった内容であるかを調査研究します。しかし私たちは、内容について最初から知識がある事はまれです。現物を目の前に、様々な資料にあたり

意味するところを探っていくのです。箱に入って積み上げられている間はただの荷物ですが、そこに私たちが目録作成という魔法をかけてると、価値が出てくるのです。そうすると、皆さんの求めている資料かどうかを目録から判断できるようになり、効率的な調査ができるようになります。

新しい目録について

来年3月に大学90周年事業の一環として錦絵目録を作成し、刊行する事となりました。既に1994年に錦絵目録を作成しているのですが、その後、御寄贈頂いたものを、簡単なジャンル分けをしてまとめます。錦絵といってもぴんとこない方もあると思いますが、浮世絵の事です。近年、美術館でも特別展という形で多くの展覧会が行われていますので、足を運んだ事がある方もいるでしょう。竹内文庫の錦絵は、歌舞伎と祭祀に関わる題材に焦点を当てた収集が行われています。

今回の目録には、「勸進帳」「助

六」を中心とした歌舞伎関連のもの、江戸の「神田祭」「山王祭」や、吉原で行われた「俄(にわか)」※というお祭りの様子を題材にした祭礼関連、それぞれ約90点、合計約180点を全てカラーで掲載予定です。実際並べて見ると、色々な事が分かります。顔料の違いは、時代によつて違う事がとてもよく分かりますので、そんな所も注目してみたいと思います。

音大で錦絵？

音大でなぜ錦絵が？と思われるかもしれませんがね。錦絵は、日本近世音楽を研究する上ではとても重要な、江戸時代の記録写真ともいえる資料なのです。当時の錦絵は、宣伝のために事前に作成されたものも多く、芝居の前宣伝や祭り気分を盛り上げるアイテムだったようです。錦絵は街中の変化、嗜好、生活習慣など、文章だけでは分からない色々な情報を知らせてくれます。どんな楽器が使用されていたか、どんな演奏形態だったか、どんな服装だったのか、

といった情報も読み取る事ができます。また当時は、今のようには家の中に手軽な娯楽がたくさんあったわけではありませんので、その意味でも「お祭り」は、準備も含めとても心躍るものだった事と想像できます。

吉原と聞くと、「いかかわしいところ」と思いかもしれませんが、しかし、「色物」があり活気の溢れるところこそ、ヨーロッパの「サロン」の様な文化の発信地になるのです。江戸の二大悪所といわれたのが芝居小屋と遊郭、そこから生まれた「錦絵」ですから、当時の最先端の文化を見る事が出来ます。まだまだ「吉原」、「郭(くるわ)芸者」、「俄(にわか)」については分からない事も多く、研究が待たれる分野です。そういう意味でも、竹内文庫を生かした更なる研究が行われる事を願っています。

近世日本音楽の世界

近世日本音楽は、皆さんにとつて少し遠い世界かもしれません。

私も皆さんと同じように西洋音楽

を中心に勉強していましたが、竹内先生の授業で義太夫正本、演奏の世界に触れ、卒業後に歌舞伎を観はじめ、少しずつ興味を持つようになりしました。何が入り口になるかは人それぞれですが、それを受け入れる好奇心はいつも持ち続ける事が必要です。普段、多くの皆さんは西洋音楽を勉強していますが、自国の文化を知り、比較する事で新しい音の世界を発見できるかもしれません。グローバルといわれる時代だからこそ、足元の文化への理解が必要です。まずは一歩、その世界を覗いてみて下さい。

※「にわか」という漢字表記は、「仁和嘉」「仁和歌」など色々なものがあります。本稿では、「俄」としました。

参考図書

『竹内道敬寄託文庫目録 その1』その11 1989〜2006 ●
3F参考図書フロア 各分類

● たかはし きょうこ 「秋の夜長、音楽に読書に」といいたいところですが、現実には…。週末ぐらひはのんびりと、芸術三昧したいですね。